

ヤマタノカレシ

中乃森 豊

ある朝、目が覚めたら、隣で眠る智也の顔が二つになっていた。  
まだ寝ぼけているに違いないと思った私は、彼の腕枕から頭を上げると何度かまばたきしてから改めてよく眺めた。

智也は心地よさそうに瞳を閉じ、微かな寝息をたてている。長い睫毛にまっすぐに通った鼻筋、少し薄い唇……紛うことなきイケメンだ。とはいえ、その芸術的な美しい顔も、首の付け根から二股に分かれて枕の上に少し窮屈そうに並んでいる様は瓜二つの双子みたいで可愛かった。

どれくらいその二つの顔を見つめていたのだろう。やがて左右の智也が同時にうつすらと瞼を開き、私の顔をしばし焦点の定まらない四つの瞳で見つめた後で二つの唇が笑みをつくって「おはよう、真美」と呟いた。魅惑的な低い声までユニゾンしていた。

「お、おはよう」

私はぎこちなく挨拶を返した。「なんで顔が二つになってるの？」とは訊けなかった。  
代わりに「そろそろ起きないと一限遅刻しちゃうよ。ほら、顔洗って」と私は彼を洗面台の鏡の前に促した。彼の身に起きていることを自らの目で確認して欲しかったから。

「講義だるいなあ。ねえ、サボって真美の友達の……早苗ちゃんと三人でどっか行かない？」

「だーめ。そろそろ出席ヤバイでしょ」

寝ぐせがついた二つの頭を肩の上で器用に回しながら智也は洗面台の前に立つと顔を洗い始めた。慣れた手つきで左右の顔に洗顔料を塗り、両手に溜めた水で順番に泡を洗い流す。洗い終わると目をつぶったままの二つの顔を私に向け、「タオル取ってくれる？」と手を差しのべた。

呆気にとられつつも、私は彼の手にタオルを載せていた。

その後、テーブルで向かい合って朝ご飯を食べているときも、智也は私が作ったハムエッグとトーストを半分に割って親鳥が雛に餌を与えるがごとく左右の口に交互に放り込んでいたし、淹れたてのコーヒーも二つの口で協力するようにふうふうと息を吹きかけて冷ました後で半分ずつ分け合って飲んでいた。

つまり、彼は顔が二つに増えたことをごく自然に受け入れていたのだ。

朝食を終えて、智也がいつもより余分に増えた首が苦しくないように襟元がゆったりしたシャツとジャケットに着替えると、私達は大学のキャンパスへ向けて歩きだした。

大学の講義が一限目からあるときはこうして前の日に彼の借りているアパートに泊まって、次の日に一緒に登校することが私の習慣になっていた。

それでも、二年ほどの交際の間に智也の顔が二つに増えたことなどこれまで一度も

ない。すれ違う通行人の視線が気になったものの、彼に関心を抱く人はいなかった。

大学に到着し、教室に入った後も智也の姿の変化には誰も注意を向けなかった。同じ講義を取っていた友達の早苗も彼の異変にはまったく気づいていない。

「おはよう。また彼氏の部屋から二人仲よく登校？ 相変わらずラブラブだね」

教室の最後列の席に並んで腰を下ろすなり、早苗はそう言って私をからかった。それから彼女は私を隔てて座る智也へ向けて微笑みながら小さく会釈した。

「おはよう、早苗ちゃん」

智也が爽やかな声で挨拶する。その声色になぜか胸騒ぎがして、ふと彼を見ると私は開いた口がふさがらなかった。

智也の二つの顔のうち、右だけが蛇のようにすると首が長く伸びて私の頭上を通り越し、早苗の首にマフラーみたいに巻きつくとその頬にキスをしたのだ。

どうやら早苗には巻きついた智也の首が見えないらしい。彼からおでこや頬にキスの雨を浴びせられようがただ真面目な表情で前を向いて講義を聴き続けている。

一方、智也の左の首も何食わぬ涼しい顔をして、壇上の教授が黒板に書いた内容をノートに書き写していた。

私はもちろん講義に集中することなどできるわけがない。授業の間中ずっと智也の右の首は早苗にまわりつき、彼女の耳元で甘い愛の言葉を囁き続けていたのだから。

「智也、ちょっといい」

講義が終わった後、私は早苗に巻きついた智也の右の首を引き剥がし、腕を引っぱって人のいない校舎の裏に連れていった。

「どうしたの？ なんか怒ってるみたいだけど」

智也は無邪気な二つの顔で私を見下ろす。一対だけでも強烈な癒し効果のあるその優しい眼差しが今は二倍になり、思わずさっきのことを許してもいいような気になったけど、あえて心を鬼にして右の顔に向かって言い放った。

「さっきのあれはなんなのよ！ どう見ても浮気じゃない！ しかも授業中に私の大切な友達と！」

すると、危険を察知したのか右の顔はポンと弾けて煙になって消えた。

「あ、逃げた！」

「え、浮気とか逃げたとか、さっきから真美は何を言ってるの？ 僕が好きなのは真美、キミだけだよ」

そう言って、残された方の智也の顔は私をまっすぐに見つめ、両腕でぎゅっと抱きしめてくれた。どうにも納得がいかなかったけれど、智也に強く抱きしめられると私は途端に何も言えなくなってしまう。

私はどうしようもないほど智也のことが好きなのだ。

智也はたしかにすごくモテる。見た目が格好いいだけではなく、誰に対しても紳士的で優しいから。女の子達から言い寄られることはしょっちゅうだし、彼自身も女の子のことが大好きだから困ったものだ。私は常に彼の周りに現れる女性の影に怯えて心が休まるときがない。

私と付き合うことになったとき、彼はそれまで交流のあった女友達と連絡を取ることを一切やめると宣言してくれて、実際にスマホに保存されていたその連絡先を私の目の前ですべて消去してくれた。だから私は彼を信じることにしたのだった。

でも、恋人同士の気持ちというものは付き合い始めの頃は太い盛り上がりつつも、二年も経てば徐々に冷めていくものだ。

私の他に気になる女性ができる度に智也の首の数はどんどん増えていった。不思議なことに数が増えてくると一つ一つの頭のサイズが小さくなった。たぶん恋した女性には平等な愛情を注ぐという彼特有の博愛精神の現れなのだろう。その首の数が八つ、つまり八股交際にまで発展したとき、私の堪忍袋の緒は切れ、彼の部屋に通うことをやめた。

それでもまだ智也への気持ちを断ち切れない私は実家の近所にある縁切りで有名な神社を訪れた。智也と私の縁を切るためではなく、彼が私以外の女性との縁を切ってくれることを願って。

「あれ、もしかして、高瀬じゃないか？」

拝殿の前で必死に拝んでいると不意に自分の名前を呼ばれて、私は顔を上げた。幼馴染みの草薙くんが装束姿で立っていた。私の初恋の相手でもあった懐かしい記憶が蘇るとともに彼がこの神社の神主の一人息子だったことを思い出した。

私が神社を訪ねた理由を話すと彼は言った。

「いくら拝んでも、恨みや憎しみを抱いたままでは悪縁を断つことはできないぞ」

「じゃあどうしたらいいの？ もう何もかもわからないのー！」

私の目からは大粒の涙がぼろぼろと落ちた。

すると、草薙くんは私を神社の拝殿の中に案内してくれて、そこに奉納されていたひと振りの刀を差し出した。

「これを貸してやるよ。日本の神話に出てくる八つの頭を持つ怪物、ヤマタノオロチを退治したという伝説の刀だ。本当か嘘かわからないけど」

「この刀で私に何をしろって言うの？」

「おまえの彼氏と女性達との悪縁を断つんだ」

「悪縁を？ でも、どうやって？」

草薙くんは刀を鞘からすらりと抜いた。細身の刀身は濡れたような光沢を放っていた。

「いいか、この刀で人の体を傷つけることはできない。できるのは悪縁の首を断つことだけだ」

「悪縁の首？」

草薙くんは頷き、刀を振り上げた。

「高瀬の彼氏は今、おまえも含めて八人の女性に同時に恋をしている。ヤマタノオロチならぬヤマタノカレシという恋の欲望に溺れた怪物となってしまった」

「ヤマタノカレシ？」

草薙くんが頷くと刀を鋭く振り下ろした。

「だからその悪縁の首を断つ。高瀬以外の女性への浮気心によって現れた七つの首をこの刀で『悪縁退散』と叫びながらすべて切り落とすんだ。そうすれば彼氏は高瀬だけを愛する元の姿に戻るはずだ」

草薙くんの手から刀を受け取りながら、そんなことが私にできるだろうかと考えてしまった。

まだ合鍵を持っていた私はその日の夜、智也のアパートに行った。

彼はお酒に酔ってベッドの上に大の字になって眠っていた。お酒が弱いくせに飲み会が好きなのだ。私は彼の真っ赤になった八つの顔を一つ一つ順番に眺めていった。やがて刀袋から刀を取り出すと鞘を抜いて構えた。そして大きく一つ息を吸い込むと「悪縁退散！」と叫んで最愛の人の首めがけて刀を振り下ろした。

翌日、私は神社に行って草薙くんにも刀を返した。

彼は刀を受け取りながら私の顔を覗き込んで尋ねた。

「どうだった？ うまくいったのか？」

「うん、首を落とすなんて私には無理って思っていたけど、その刀で首を切るとポンって煙になって消えちゃうんだね。今は体が軽くなった感じ。悪縁を断つってこんなに清々しいものなんだね」

「でも大変だっただろう？ 刀を振り下ろして七つの首を断つのは」

私は首を左右に振ると人さし指を立てて見せる。

「悪縁の首を断ったのはたった一つだけだよ」

「え、一つだけって？」

「私と智也との悪縁の首」

一瞬、草薙くんが目を丸くする。それからフツと笑って私に訊いた。

「八つもある首の中からどうして自分のことを好きな彼氏の首だけを迷わず断ち切れたんだ？」

「わかるに決まってるじゃない。智也のことを世界中の誰よりも愛していたのはこの私だったんだから。私を大好きでいてくれた彼の表情を忘れることなんてできないよ」

「だったら、その男とはまだ……」

私はきつぱりと首を横に振る。瞳からこぼれた涙が風に舞った。

「もう終わりにしたの。智也のことは好きだけど、一緒にいて辛い恋はもうおしまい」

草薙くんは静かに頷くと、微かに頬を赤く染めて「これやるよ」と白衣の袂から赤いお

守りを取り出して私の手に載せた。  
そこには金の糸で「良縁成就」と刺繍されていた。